

東京ボーイズコレクション エピソードII

17歳のシンデレラ

寺西一浩 監督作品

脚本 沢崎麻也

登場人物

三島ハルキ (28) アイドルグループ「エターナル」の一員 アオイの幼なじみ。

滝口アオイ (17) 高校生、シンデレラオーディションの決勝に進むも病に侵される

滝口芳江 (33) アオイの母 煮込みてらにしの女将

山川健介 (33) 煮込みてらにしの板前

アオイ (幼少時代)

ハルキ (幼少時代)

トウジ 幼少時のアオイの友達 (いじめっこ)

福島房江 (18) 芳江の妹

福島真紀 (30) 芳江の娘

石橋博之 (40) サラリーマン 煮込みてらにしの常連客

村上誠二 (35) サラリーマン 石橋の部下で同じく常連客

菊池司 (24) 煮込みてらにしの客

米森美鈴 (24) 菊池の彼女

斎藤充 () 煮込みてらにしのアルバイト

冴島リョウ (28) 元アイドルグループのリーダー 現在人気俳優 ミラーズカンパニーの看板

トウゴ (24) 「エターナル」のリーダー

カエデ (19) 「エターナル」のメンバー

セナ (21) 「エターナル」のメンバー

ノーティボーイズ アオイがファンの韓流アイドルグループ

森脇和也 () エターナルの所属する事務所「株式会社ミラーズカンパニー」の社長

久光孝夫 () ミラーズカンパニーの男性社員

太田菊枝 (40) ミラーズカンパニー「エターナル」担当のマネージャー

尾西利香 (24) ミラーズカンパニーのデスク、女性

五十嵐善幸 () 五十嵐総合病院 院長

小森貴子 () 五十嵐総合病院 看護師

梶凜々子 () 梶クリニック院長 免疫治療の権威

三原早苗 (24) 梶クリニック 受付

園部みゆき () 梶クリニックの患者家族

広石詩織 (6) 予備校講師

西川由美 (12) アオイの親友

金井宗助 (12) アオイの友人

向井直人 (12) アオイの友人

飯干陽介 (12) アオイの友人

黒崎淳 () シンデレラオーディションのプロデューサー

寺内洋子 () シンデレラオーディションのMC

花井 () シンデレラオーディションの審査委員長

桑原玲子 () シンデレラオーディションの審査員

蛭川泰樹 () シンデレラオーディションの審査員

柳井美和子 () シンデレラオーディションの事務

大内美晴 (32) シンデレラオーディションの最終候補者

倉橋至 (22) テレビ局のAD

板倉茂 () フリーの芸能カメラマン

三谷省吾 () コンサート会場の舞台監督補佐

岡本和樹 () 菊池と美鈴の友達

山田浩二 () 菊池と美鈴の友達

多田野涼子（一）菊池と美鈴の友達

山崎恵梨香 菊池と美鈴の友達

千堂和美 ○二次オーデイション参加者

岡田かおる ○二次オーデイション参加者

○オープニング 公園

秋

車いすに乗っているアオイ、それを押しているハルキ。

夏の新緑が陰り、木々は葉を落とし始めている。

桜の木が立っている。それを見つめるアオイ。

アオイ 「子供の頃、この桜の木の下で遊んだよね」

ハルキ 「ああ…」

アオイ 「満開になるときれいなんだ」

ハルキ 「…」

アオイ 「でももう、あたし、見れないんだよね」

ハルキ 「そんなこと言うなよ」

アオイ 「だつて…」

ハルキ 「シンデレラオーディション諦めないんだろ？」

アオイ 「…」

ハルキ 「絶対に病気は治る、そして来年またこの桜の下で、昔のように遊ぼう」

アオイ 「ハルキ」

ハルキ 「俺は諦めない」

アオイ 「ハルキは強いな」

アオイ、桜の木を見上げて、

アオイ 「きつと帰ってくるから、待っててね」

数枚のシャッター音。

公園の陰から、板倉が望遠レンズを二人に向けている。

板倉 「スクープ、頂き」

そう呟くと、そそくさと去っていく。

■一か月前

○煮込みてらにし 店内

客で賑わっている店内。ひっきりなしに注文が入る。女将の芳江が客の間をすり抜けて、酒を運んでいる。調理場では、山川健一が黙々と料理をこなしている。

芳江 「はい、ビールお待ちい！」

石橋 「いやあ女将、今日混んでるねえ。あの若いバイトどうしたの？」

芳江 「斉藤君でしょ。寝坊だつて」

村上 「こんな夜に寝坊っすか？」

芳江 「ほら、あの子、昼間もバイトしてるから——」

どこからか「煮込みとヤッコ」という注文の音が聞こえる。

芳江 「はい、ただいまー（石橋たちに）ゆっくりしてつてね。（山川に）健ちゃん、三番さんに煮込みとヤッコね」

そう言つて、再びてきぱきとテーブルの間を歩き回る。

そこへ、アオイが帰ってくる。

アオイ 「ただいまあ」

そのまま店内をすり抜けて部屋に入ろうとする。

芳江 「アオイ、お帰り。お願い、手伝つて」

アオイ 「まーた斉藤さん遅刻っ？」

芳江 「お願いお願い」

アオイ 「はいはい」

アオイ、カバンを部屋に投げ入れると、エプロンをつける。
厨房の山川と目が合う。

山川 「すみませんね」

アオイ 「全然。で、何か持つてく？」

山川 「じゃあこれを、三番さんをお願いします」

アオイ 「りよーかい」

アオイ、山川からヤツコと煮込みを受け取って運ぶ。

三番テーブルには若い男女（菊池と美鈴）がいる。

アオイ 「お待たせしました」

菊池 「どうも」

美鈴 「ねえ菊ちゃん、見てみて」

美鈴が店内のテレビを指さす。

つられてアオイもテレビを見る。歌番組にエターナルが出演している。

美鈴 「やっぱハルキ、かっこいいよね」

菊池 「アオイにビールお代わりください」
アオイ 「・・・」

アオイ、テレビに映っているハルキを見つめる。

菊池 「あの、ビールを…」
アオイ 「あ。はい、すいません、えーっとビールですね」
美鈴 「アオイにもしかしてエターナルファン？」
アオイ 「い、いえ、別に…」

アオイ、その場を離れる。

アオイ 「お母さん、三番さん、ビールだって」
芳江 「はいよ。それにしてもハルキ君凄いわねえ、あつという間にスターになっちゃって」
アオイ 「そだね…」
芳江 「芸能界で売れるっていうのも大変なんですよ？」
アオイ 「知らないよ」
芳江 「きつとすごい努力してるのよ。あんたも見習って勉強してよ」
アオイ 「そんなことよりも、ビール」
芳江 「あーそうだった、ごめんごめん」

芳江、あわててビールを出しに行く。

石橋 「アオイちゃん」

アオイ 「石橋さん、いつもありがとうございます」

石橋 「ちよつと酔っている」アオイちゃんさ、こいつ（村上）がさ、店にアオイちゃんがいると酒が旨いって言うんだよ」

村上 「何言ってるんすか、課長でしょ。デレデレしちゃって」

石橋 「俺があ？俺がそんなデレデレしてるかあ？」

村上 「あーほらアオイちゃん、見てみ」

村上がテレビを指さす。

そこには番組テロップで「シンデレラオーディション」の募集要項が映し出されている。

村上 「シンデレラオーディションだって。アオイちゃん、ああいうの興味ないの？」

アオイ 「あたしですか？うーん、どうかなあ…」

石橋 「絶対、合格する。おじさんが言うんだから間違いない」

村上 「やつは課長そうっすよね。その辺のタレントよりアオイちゃんの方がずっと可愛いと思うんすよねえ」

そこへ、芳江がやってくる。

芳江 「もー石橋さん、娘に変なこと吹き込まないでくださいよ。また高校生なんだから、勉強して大学行ってもらわないと」

石橋 「じゃあオーディション、女将さん出ちゃうか？」

芳江 「駄目よ、私が出たら優勝しちゃうから。もー何言わせてるの。ほらあ村上さん、お酒ないよ、そろそろ日本酒いっとく？」

村上 「じゃあ、いつもの貰いましようか」

芳江 「はいはい。健ちゃん、熱燗ひとつね」

そう言って、再び店を回り始める芳江。

石橋 「やっぱ女将は商売上手だよなあ」

村上 「かなわないっすねえ」

などと、笑いあう二人。

アオイ、ふとテレビを見る。ハルキが笑顔で歌っている姿が映っている。

○予備校

講師の広石詩織が黒板を背に教鞭をとっている。

詩織 「いいですか皆さん。皆さんは昼間高校で勉強し、夜はここで勉強しています。だからと言って目指す大学に入れると

向井
詩織

は限らない！ かのガンジーは言いました「明日死ぬと思つて生きなさい。永遠に生きると思つて学ばなさい」私が何を言いたいか分かりますか？ はい向井君」

「えつと… どうせ死ぬなら好きなことやった方がいい」

「ちがうー！ 学ぶことなんて永遠にあるんだから、死ぬ気で勉強しろつてことですよ」

詩織の講釈を眠そうな顔で聞いているアオイ。

ポケットのスマートフォンが震える。詩織の目を盗んでこっそり画面を見る。

ハルキからのLINEが届いている。

中身を見ようとした時、親友の西川由美が声をかけてくる。

由美
「ねえアオイ」

アオイ
「なに？」

由美
「こないだの話、どう？」

アオイ
「どうつてなにが？」

由美
「エターナルのハルキ」

アオイ
「ああ…」

由美
「ああ、じゃないよ。紹介してくれるんですよ？」

アオイ
「でもほら、あつちも忙しいみたいだから。最近連絡とってないんだ」

由美
「取れないわけじゃないんですよ？」

アオイ
「取ろうと思えばね」

由美 「じゃあ思つてよ。親友が頼んでるんだからさあ」

アオイ 「でもあたしたちと住む世界違うわけだし」

由美 「心配しないで。あたしはそこら辺のにわかミーハーファンとは違うから。会ったからっていきなり抱きついたりしないよ」

アオイ 「そーゆー心配じゃないんだけど」

由美 「かのガンジーだつて言つてたらしいじゃん。明日会えると思つて生きなさい。まさにその心境なわけ」

アオイ 「まあ機会があつたらね」

由美 「マジで早くしてよ、楽しみで勉強どころじゃないんだから。大学落ちたらアオイのせいだかね」

アオイ 「はいはい…」

ため息のアオイ。ポケットのスマホが再び震えた。

ハルキからだ。それを確認すると、再びポケットにしまうアオイ。

○コンサート会場 楽屋

廊下でハルキがスマホをいじっている。

LINEの画面には滝口アオイとある。

「最近どうしてる？ 明日店に寄ろうかと思つてるけど、いる？」
既読がつかない。

そこへ、エターナルのリーダー、トウゴが楽屋から出てくる。

トウゴ 「なんだ、ここにいたのか」

ハルキ、スマホをポケットに入れる。

トウゴ 「楽屋、入らねえのか？」

ハルキ 「ちよつと電話してたもんで。すいません」

トウゴ 「あつそ。ちよつと相談があるんだけどさ」

ハルキ 「なんですか？」

トウゴ 「今日の五曲目にさ、「夜明けの天使」歌うじゃん」

ハルキ 「ええ」

トウゴ 「いつもはサビのパート、俺たちでハモるじゃんか。今日は、お前ソロで歌ってみないか」

ハルキ 「どうしたんすか？ いつも、あのハモりが気持ちいいって言ってたのに」

トウゴ 「心境の変化だよ。一応社長と太田さんにはオーケーもらってたから」

ハルキ 「まあトウゴさんが言うなら」

トウゴ 「じゃあそういうことで。よろしくな」

そう言って楽屋に入るトウゴ。

それを見届けたかのように、マネージャーの太田菊枝がやってくる。

菊枝 「お疲れ。トウゴから聞いた？ サビの件」

ハルキ 「はい、たった今。いきなりどうしたんですか？」

菊枝 「彼、分かつちやつてるのよ、あなたとの歌唱力の差を」

ハルキ 「え？」

菊枝 「並んで歌ったら、あなたには勝てない。いいものを作るためには自ら身を引くことも必要。でもそれってなかなか出

来ることじゃない。だけどトウゴはそれが出来た。彼をリーダーにして正解だったわ」

ハルキ 「そうだったんですか…」

菊枝 「ウチの冴島リヨウを超えられるのは、あなたかもしれない。マネージャーとして期待してるんだから。頼んだわよ」

ハルキ 「…はい」

そこへ、舞台監督補佐の三谷がやってくる。

楽屋をノックして扉を開ける。

三谷 「ではエターナルの皆さん、リハの準備が出来ましたのでステージお願いします」

はいよー、という元気な声が響く。

やがて、メンバーのセナ、カエデ、トウゴが出てくる。

三谷 「ではこちらです」

セナとカエデは仲が良いのか、冗談を言い合いながら三谷の後をついていく。

そのあとをトウゴ、そして菊枝が歩き始める。

彼らの背中を見つめるハルキ。ふとポケットのスマホを取り出し、LINEを見る。

既読はついていない。

菊枝 「どうしたの？ 行くわよ」

ハルキ 「はい」

スマホをポケットに入れ、菊枝たちに走り寄るハルキ。

○公園

予備校帰り、時刻は夜

アオイ、由美、金井宗助、向井直人、飯干陽介がいる。

各々、ハンバーガーショップで買った飲み物やバーガー、あるいは缶ジュースを手に入れている。

飯干 「まったくさあ、広石の講義って授業じゃなくて講演会だよなあ。あれでいいこと言ってるつもりなんだぜ」

金井 「別にいいじゃん。勉強なんて、やる奴はやる。何を言われたってやらねえ奴はやらねえ」

飯干 「まあね、予備校なんて親を安心させるために行ってるようなもんだけどさ……そういや直人、予備校辞めるって決まったの？」

由美 「え、マジで？」

向井 「ああ、今月いっぱいだね」

由美 「初耳い、なんでなんで？ 大学行かないの？」

向井 「就職しようかなって思ってた」

アオイ 「芸大行って絵の勉強して画家になるって言ってたよね。夢、諦めちゃうの？」

向井 「諦めたわけじゃない。絵は働きながらでも描けるし」

飯干 「まあ、夢は諦めなきゃいつか叶うって言うしな」

金井 「お前、それって広石の受け売りじゃん」

飯干 「ええ？ あいつこんな良いこと言ってた？」

金井 「結構あいつの授業好きなんじゃねえの？」

笑いあう面々。

由美 「決めた、私の夢はハルキ君とラブラブになること。諦めなきゃいいでしょ」

金井 「そいつあハードル高いなあ」

向井 「お前らの夢ってなんだよ」

飯干 「俺は、でかい島を買ってそこにテーマパークを作る」

由美 「子供みたいなこと言っちゃって」

向井 「俺はいいと思うよ。夢を諦めていくことが大人になることだっていうなら俺は否定するね」

金井 「賛成」

由美
一同

「じゃあ、ずっと子供の私たちにカンパニー！」
「カンパニー」

手に持った缶ジュースやハンバーガーなどを掲げる。
持っていた缶ジュースが空になった金井が提案する。

金井

「缶蹴りしようぜ」

由美

「缶蹴り？」

向井

「すげー久しぶり、やろうやろう！」

盛り上がる面々。

じゃんけんして、飯干が鬼になる。

飯干

「じゃあ十数えるから、お前ら散れ散れ」

隠れ場所を探すために散っていく。

一緒に走っていくアオイと由美。

由美

「ねえ、アオイの夢ってなに？」

アオイ

「あたしの夢… そうだなあ、あたしの夢は——」

夜の缶蹴りが始まる。

みんな無邪気に走り回っている。

アオイも、皆に交じって缶蹴りに走る。

アオINA 「あたしの夢って、ほんとは分かっている。一步を踏み出す勇気がないだけなんだ。私の人生は私で決めなきゃ。やりた
いことを、やらなきゃ！」

アオイが缶を蹴る。

悔しがる飯干、盛り上がる面々。

アオイの蹴った缶が遠くまで高くまで、舞い上がる——

○煮込みてらにし

閉店後のてらにし

芳江と山川、斉藤が後片付けをしている。

斉藤 「アオイちゃん、今日は遅いですね」

芳江 「今日は友達とお茶してくるって連絡があったわ」

斉藤 「心配だなあ」

山川 「斉藤、お前よりしつかり者だから大丈夫だ」

斉藤 「ですね」

芳江 「そういえば、健ちゃん、あの子最近ずっと何か考え事してるみたいなのよ、何か聞いている？」

山川 「いえ、自分は何も」

芳江 「そう。ならいいんだけど——」

芳江、フラッと倒れる。

斉藤 「え？」

山川 「女将さん！」

あわてて芳江に駆け寄り寄る山川と斉藤

斉藤 「女将さん？ 大丈夫ですかっ」

山川 「斉藤、救急車だ」

斉藤 「はいっ！」

斉藤があわてて電話をかける。

山川が芳江に呼びかけ続けている。

○病室

病室にはベッドに寝ている芳江とその傍らに山川が座っている。
アオイが走りこんでくる。

アオイ 「お母さん！」

山川 「安心してください。ただの過労だそうです」

アオイ 「病気とかじゃないの？」

山川 「その心配はありません」

アオイ 「良かったあ」

アオイ、寝ている芳江を見つめる。

ふと目を開ける芳江。

アオイ 「お母さん」

芳江 「アオイ… ごめんね、心配かけちゃって」

アオイ 「ううん。それよりゆつくり休んで。お母さん、働きすぎなんだよ」

芳江 「でも、アオイに大学行ってもらいたいしね。お母さんいっぱい稼がなきゃ…」

アオイ 「そんな心配しなくていいよ」

芳江 「ありがと」

そう言っつて目をつむる芳江。

病院からの帰り道。

アオイと山川が並んで歩いている。

アオイ

「山川さんがいてくれて助かりました」

山川

「いえ。斉藤もいましたし」

アオイ

「そういえば斉藤さんは？」

山川

「店の片づけを任せてます。ああ見えて、女将さんが倒れたのは自分が遅刻するからだって反省してましたよ」

アオイ

「そうなんだ…」

山川

「倒れる前、女将さんがアオイさんのこと心配してました」

アオイ

「私の、なに？」

山川

「最近、なにか考え事をしてると」

アオイ

「ああ、気付いてたんだ…」

山川

「大学、ですか？」

アオイ

「大学は行く。お母さんの願いだもん。でも、私の願いは違う…」

山川

「…」

アオイ

「ねえ、山川さんの夢ってなに？」

山川

「夢、ですか。そうですね、あの店をもっと繁盛店にして、お二人を楽にさせたい、ですかね」

アオイ

「それって本当に山川さんの夢？」

山川 「亡くなった大将の夢です。最初は約束でしたが、今は私の夢になりました」

アオイ 「山川さんがいてくれたら、すぐ叶う夢だね」

山川 「アオイさんの夢は、叶うのが難しい夢なんですか？」

アオイ 「難しい、夢物語。ドン・キホーテみたい」

山川 「ドン・キホーテですか…でもきつと彼は後悔はしてなかったと思いますよ。アオイさんも後悔だけはしないでください」

アオイ 「そうね」

山川 「ドン・キホーテも、貫き通せばシンデレラになれると思います」

その言葉に勇気をもろうアオイ。

○煮込みてらしし 店前。

すでに明かりも消えている店前。

ハルキが立っている。

そこへ、アオイと山川が戻ってくる。

ハルキに気付くアオイ。

アオイ 「ハルキ」

山川 「では私はこれで」

アオイ

「今日はありがとうございました」

山川

「明日は病院に寄つてから店に入ります。ではおやすみなさい」

山川、ハルキに軽く会釈をすると、歩き始める。

ハルキの前に歩いてくるアオイ。

アオイ

「どうしたの？」

ハルキ

「既読にならないからさ、心配になって」

アオイ

「ごめん……」

ハルキ

「何かあつたの？」

アオイ

「お母さんが倒れちゃつて」

ハルキ

「大丈夫なの？」

アオイ

「単なる過労だつて。それよりハルキこそ。今日はライブがあつたんでしょ？」

ハルキ

「別に大丈夫だよ」

アオイ

「ハルキは大スターなんだから、こんなとこに来ちゃダメだよ」

ハルキ

「大スターってなんだよ。アオイからそんなこと言われるとは思わなかつたよ」

アオイ

「幼なじみだからつて、もう気安く話せる立場じゃないと思うんだ」

ハルキ

「立場なんか関係ないだろ。忘れたか？ 俺はお前を守るつて約束したのを」

アオイ

「子供の頃の話でしょ」

ハルキ

「でも俺は忘れてない」

アオイ、ハルキを見つめる。

アオイ 「シンデレラオーデイションって知ってる？」

ハルキ 「ああ、うちの事務所が協賛してるあれだろ」

アオイ 「うん。応募しようと思う」

ハルキ 「マジで言ってるのか？ 協賛してるからって俺がどうの出来る立場にはないぜ」

アオイ 「当たり前だよ。そんなこと頼むわけないじゃん。ただね——」

ハルキ 「？」

アオイ 「もつとハルキに近づきたいの」

ハルキ 「立場を変えらるってわけ？」

「薄く笑って」ハルキを見て、凄いなって思った。夢を叶えるって輝けることなんだよね。今のハルキは私にとつて眩しい。でもいつか私もハルキのように輝いて見せる」

ハルキ 「それがアオイのやりたいことなんだね」

アオイ 「うん」

ハルキ 「応援する」

アオイ 「応援なんかしなくていい。ただくじけそうになったら、守ってね。約束なんですよ」

ハルキ 「分かった。何があっても守る、きつと」

見つめあい、笑みを交わす二人。

○アオイの自室

ベッドに横たわっているアオイ。

アオイ 「守る、か…」

○回想シーン

公園。子供のアオイが砂場で一人で遊んでいる。

そこへ、同級生のトウジがやってきて、アオイの作った砂の山をけ飛ばす。

トウジ 「ともだちいない、ばっかアオイ〜」

トウジ、アオイをからかう。

泣き出すアオイ。

トウジ 「泣いてんじやねーよ」

アオイを突き飛ばすトウジ。砂場に尻もちをつくアオイ。

ハルキ 「やめろー！」

ハルキが走りこんできて、トウジを突き飛ばす。
驚いて泣き出すトウジ。

ハルキ 「女の子いじめるなんてサイテーだぞ！」
トウジ 「うっせー バーカー！」

トウジ、逃げるように去っていく。

ハルキ、崩れた山を元通りに作り始める。
それを黙って見つめるアオイ。

ハルキ 「ほら出来た。壊れたら作り直せばいいんだ」

アオイ 「ありがとう……」

ハルキ 「俺は三島ハルキ」

アオイ 「滝口アオイ……」

ハルキ 「アオイちゃんか。友達になる。あんな奴にまたいじめられたら、俺が守ってやる」
ハルキ 「うん」

二人で、砂場の山を作り始める。

○アオイの自室

アオイ 「あの日から、ずっと守ってくれてたんだね… ハルキ…」

なつかしさに、涙交じりの笑みを浮かべる。

突然、腹痛が襲う。

お腹を押さえて、声が出ない。

よろける足で部屋から出るアオイ。

○煮込みやてらにし

階段から降りてきて、厨房のシンクにたどり着くアオイ。

蛇口から勢いよく水を出して、コップに注ぎ一気に飲み干す。

大きく息をついて、痛みが治まるのを待つ。

肩で大きく息をつく。

○煮込みやてらにし

数日後、数人の客が入っている店内。
戻って来た芳江が相変わらず忙しく店内を歩き回っている
常連の石橋たちもいる。

石橋 「いやあ、女将さんが倒れたって聞いたときは驚いたよ」
芳江 「すいませんねえ、ご心配おかけして。もう元気になりましたから」
村上 「やっぱりこの店は、女将さんとこの煮込み、これがなきやダメっすよね」
芳江 「うまいんだからあ、今日もたくさん飲んでっつね」

新規の客が来る。

菊池と美鈴のカップルが友達を何人か連れて来た。

美鈴 「この店の煮込みが抜群に美味しいのよ」
芳江 「いらっしやーい。あら、いつもありがとね」
菊池 「今日は友達連れて来ました」
岡本 「よろしくです」
芳江 「ありがとー ご新規五名様ねー」
斎藤 「はい、こちらどうぞー!!」

談笑しながら席に座る五人。

石橋

「流行ってるねえ」

芳江

「おかげさまで」

そこへ、アオイが帰ってくる。

アオイ

「ただいまあ」

芳江

「おかえり〜」

そのまま部屋に入っていきこうとするアオイ。

芳江

「あーアオイ、ちょっと待って」

芳江、懐から封筒を取り出し、アオイに手渡す。

アオイ

「なにこれ？」

芳江

「区の無料健康診断の案内」

アオイ

「健康診断？ 別にいいよ」

芳江

「私はね、今回ほんとに身に染みたわけ。若いからって安心しちゃダメ。自分の為じゃなく、お母さんのために行く」と

思っ

アオイ

「…分かった」

芳江

「ちゃんとわかっている？　お願いよ」

アオイ

「はい」

アオイ、生返事をして階段を上がっていく。

○アオイの自室

机に向かっているアオイ。

机の上には、シンデレラオーディションの応募用紙と、健康診断の用紙がある。

両紙に名前と連絡先などを書き込む。

書き終わり、ペンを置くアオイ。

○予備校

相変わらず、広石詩織の講義を聞いている面々。

詩織

「今日は死ぬのにもってこいの日だ。生きているすべてのものが、わたしと呼吸をあわせている。すべての声が、わた

しの中で合唱している。全ての美が、わたしの目の前で休もうとしてやってきた。あらゆる考えは、私から立ち去っていった。……これはネイティブアメリカンの言葉で：作品の中でも非常に多く引用されているといっても過言ではなく…

由美が声をかけてくる。

由美 「ねえねえ、昨日のゴールデンミュージック見た？」

アオイ 「ごめん、テレビあんまり見ないから」

由美 「チョー凄かったよ、エターナルとノーティーボーイスの競演」

アオイ 「ふうん」

由美 「やっぱエターナル、サイコー」

アオイ 「つてか、ハルキしか見てないんでしょ？」

由美 「ばれた？ アオイ、ノーティーのファンだったじゃん。見といた方が良かったよお」

アオイ 「録画してないの？」

由美 「してるに決まってるじゃん。見に来る？」

アオイ 「じゃあ今度の休みに」

由美 「オッケー。あの二組絶対友達だから、ハルキ君経由でノーティーにも会えるんじゃない？ 聞いてみたら？ あたし

も付いてくから」

アオイ 「どーせハルキ目当てなんでしょ？」

由美 「しょうがないじゃん、アオイ、紹介してくれないんだもん」

詩織 「はい、そこ！ コソコソ話をしない！」

由美

「すいませーん」

詩織

「ちなみに、ノーターボーイズは私も好きです」

由美

「目が点になって……はあ……」

○路上

予備校からの帰り道。アオイが一人で歩いている。

それを追いかけてくる由美達。

金井

「おーい、アオiiiiー」

アオイ

「どしたの？」

飯干

「みんなで飯食いに行こうかって話になってんだけど、いかない？」

アオイ

「あー、今日はちよつと……」

由美

「店？」

アオイ

「うん。手伝わないと」

向井

「じゃあしょうがねえ。またお母さん倒れたら大変だもんな」

由美

「ハルキ君のこと、頼んだわよ、マジで」

飯干

「由美、行くぞ」

由美

「うん。(アオイに) じゃね」

去っていく面々。それを見送るアオイ。

○煮込みてらにし

閉店後の店内。

カウンターに座っている芳江。

斉藤

「じゃあお疲れ様でしたあ」

芳江

「はい、どうもね」

斉藤出ていく。

山川

「どうしました？」

芳江

「え？」

山川

「浮かない顔ですよ。また疲れてるんじゃないませんか？」

芳江

「そんなことないわよ。健ちゃんこそ、ちゃんと休んでる？ 私はいいけど、健ちゃんが倒れたらこの店潰れちゃうんだから」

「身体だけは丈夫なんでご心配なく。では自分も上がらせていただきますね」

芳江

「うんありがと」

山川

「お疲れ様でした」

芳江

「おつかれ」

山川、出ていく。

一人残った芳江。懐から封筒を取り出し、中身を広げる。

それはアオイの、健康診断の結果だった。

「再検査」の文字が目に入る…

芳江 「まさか、よね… まさか…」

芳江、カウンターに突っ伏す。

○アオイの自室

その頃…

テーブルに向って封筒を開けるアオイ。

中身を取り出し、確認する。

「シンデレラオーデイション 書類審査通過のお知らせ」とある。

大きく息を吐き、安心した表情を見せる。

ドアをノックされる音。

アオイ 「はい」

芳江 「入っていい？」

アオイ 「いいよ」

ドアが開かれる。

そこには神妙な面持ちの芳江が立っていた。

○ミラーズカンパニー 事務所の会議室

会議室にエターナルのメンバーとマネージャーの菊枝 男性社員の久光がいる。

セナ 「どういうことだよ、ああ？」

菊枝 「決まったことだから」

セナ 「なに勝手に決めてるんすか？ 冗談じゃないっすよ。コンサートのMCは俺でしょ。結成の時からお前は喋りが旨いからMC任せるって、そう言われたんですけどねえ！」

トウゴ 「別に全部のMCを外すわけじゃない」

セナ 「でもさあ、四人で役割分担してやってきたんでしょ。歌とダンスと喋りとイケメン。なんで寄りによって俺の領域にハルキが入ってくるんすかっ。なあカエデ、おめえも何か言えよ」

カエデ 「僕も最近、エターナルがどうなるか心配です」

菊枝 「心配って何よ。今やあんたたちはイケイケなのよ。心配することなんかある？」

カエデ 「トウゴさんとハルキの歌、なんでハモリやめちやったんですか？」

菊枝 「それは…」

トウゴ 「俺が決めたんだ」

カエデ 「だから、何ですか？ 僕たち全員歌うたうけど、やっぱ中心はトウゴさんなわけで、歌でトウゴさんが身を引くっていうのが納得いかなくて」

セナ 「何でもかんでもハルキか？ 結局アレでしょ、事務所としては一番人気のハルキを売り出したくて、俺たちは引き立って役に回れるってことなんでしょ」

久光 「そんなことは考えていませんよ」

セナ 「久光さんさあ、きれいごとはいいんすよ。本音を聞かせてもらえませんかね」

久光 「本音も何も、四人全員平等に考えていますよ」

セナ 「全然平等じゃないから言ってるんですよ！」

突然会議室のドアが開く。冴島リョウが立っている。

リョウ 「だったら辞めるか？」

セナ 「リョウさん…」

トウゴたちあわてて立ち上がり「おはようございます」と挨拶をする。

リョウ 「事務所に来てみたら、おめえらの声がるさくて打ち合わせなんか出来やしねえ」

トウゴ 「すいません」

リヨウ 「まあ俺も昔はグループにいたから、いろいろ思うことはあったよ。でも最終的には、そのグループにいるから飯が食えて、ファンが出来て、好きなことが出来るんだって気付いた。エターナルにいる以上、お前らはエターナルの歯車なんだよ。ハルキっていう歯車が大きくなったんだから、他の歯車が影響を受けるのは当然じゃねえか。まあそれが分かっているのはトウゴだけみたいだけどな」

セナ 「リヨウさんには悪いですけど、納得いきません」

リヨウ 「だったら辞めるんだな」

久光 「リヨウさん、それは——」

リヨウ 「ただし、ハルキが陰でどれほどの努力をしているか分かって言ってるんだったらな」

セナ 「え…」

リヨウ 「エターナルに入って、人気が出て、チャホヤされて、お前が有頂天になってる陰で、ハルキがどれだけ歌やダンスやMCの練習をしているか。自分の役割を取られて怒ってる暇があるなら、人の役割をブン捕れるくらいお前も努力してみろ。お前らがそれをやらなきゃエターナルの先はない。どうせアイドルグループは永遠じゃないんだ。いずれ解散の時がくる。その後この世界で生きていけるのは、今のところハルキだけだ」

セナ達、こぶしを握り締める。

リヨウ 「ハルキ、言わないでくれたってことを言っちゃまった。すまない」

ハルキ 「いえ…」

リヨウ 「俺はエターナルが好きだ。もっと上を目指せるグループだと思ってる。セナも甘いところがあるが、悪い奴じゃない。」

水に流して、これからもよろしくな」
「こちらこそ、ありがとうございます」

そこへ、デスクの尾西利香が入ってくる。

利香 「冴島さん、お話し中すみません。月刊シアターライフの取材の方がいらつしやいました」

リョウ 「分かった。ちよつと待ってもらって」

利香 「はい。失礼します」

リョウ 「すまないけど、今度公開される映画の取材があるんだ」

久光 「じゃあみんな、これでおしまいでしょうか」

トウゴ 「すみませんでした」

トウゴ、出ていく。

セナとカエデがハルキの前に立つ。

セナ 「悪かったな。ハルキに対しては悪気はないんだ」

ハルキ 「分かってます」

セナ、手を差し出す。それを握り返すハルキ。

安心したように出ていくセナ。

カエデ 「ダンスは負けませんから」
ハルキ 「うん」
カエデ 「じゃ」

カエデも出ていく。

菊枝 「はあ、まったく。一時はどうなるかと思ったわ」
久光 「ほんとですよね」
菊枝 「リヨウちゃん、サンキューね」

そういいながら二人出ていく。
残されるリヨウとハルキ。

リヨウ 「社長はお前のソロデビューを考えてる」
ハルキ 「え……」
リヨウ 「その相談で早めに呼ばれたんだ」
ハルキ 「そうだったんですか」
リヨウ 「安心しろ。だからと言ってエターナルを辞めるわけじゃない。みんなお前に期待してるってことだ。潰されないように、強くなれよ」

ハルキ 「はい、ありがとうございます」

ハルキ、部屋を出ていく。

○五十嵐総合病院

エスカレーターを上がってくるアオイと芳江。

アオイ 「大丈夫だよ、なんか数値とかでひっかかったただだよ」

芳江 「ならいいけど… なんか不安で…」

アオイ 「やめてよ。今日これからオーデイションだから。怖がらせないでよね」

芳江 「ねえ、今までめまいで立てなかつたとか、急にお腹が痛くなつたとか、そういうことなかつた？」

アオイ 「べ、別になかつたよ。いたって健康だつて」

芳江 「ならいいけど…」

アオイ 「検査終わったら、すぐにオーデイション行くからね」

芳江 「ええ、頑張ってきてね…」

アオイ 「もー元気がない。どっちが検査受けるか分かんないじゃん」

○検査室

○検査室前

ベッドに横たわり、血液などを抜かれているアオイ。

長椅子に座っているが、気が気ではない様子の芳江。

○検査室前

しばらくして、部屋からアオイが出てくる。

芳江 「どうだった？」

アオイ 「別に、なんてことはなかったよ。じゃあオーディション行ってくるね」

芳江 「休まなくて平気？」

アオイ 「平気平気」

そう言って、駆け出していくアオイ。

看護師の小森貴子がカルテをもって部屋から出てくる。

貴子 「滝口さん」

芳江 「はい」

貴子 「本日の検査結果は明後日、ご連絡差し上げます」

芳江 「そうですか。分かりました」

貴子 「では」

再び部屋に入る貴子。

心配がぬぐえない芳江の表情。

○オーディション会場 控室

オーディション控室。

数十人の女性がパイプ椅子に座っている。

シンデレラオーディションの事務方、柳井が説明をする。

柳井

「皆さん、書類審査の通過、おめでとうございます。本日は二次オーディションとなります。このオーディションにて最終候補を五名に絞り、来る○月○日、……ホールにて決勝オーディションを行います。本日は五名ずつオーディションを行います。お名前を呼ばれましたら、隣の審査室にお入りください。何かご質問は——」

○オーディション会場内

テーブルが並べられ、審査員が並んでいる。

テーブルの前には「シンデレラオーディション 総合プロデューサー 黒崎淳」

「協賛 株式会社ミラーズカンパニー 代表取締役社長 森脇和也」

「シンデレラオーディション 審査員長 花井幸太郎」

という紙が貼られている

一番手の五人がオーディションを受けている。

○控室

アオイ、緊張した面持ちで座っている。

アオイの近くでコソコソ話す会話が聞こえる。

岡田 「ねえ見た、今日の審査員、メインどころばかりが来てるよ」

千堂 「つてことは、実質今日が本チャン？」

岡田 「まあ、よっぽどいい子がいたら、決め打ちだろうね。最終審査なんてお披露目会みたいなもんじゃない？」

千堂 「うわっ チョー緊張する」

そんな会話が聞こえてきて、さらに緊張するアオイ。

隣に座っていた大内美晴が声をかける。

美晴 「緊張しすぎよ」

アオイ 「え？」
美晴 「顔がこわばってる。そんなんじゃない印象持たれないよ」
アオイ 「こういうの初めてなので」
美晴 「そうなんだ。私はしょっちゅう。慣れたもんよ。全然緊張しない」
アオイ 「うらやましいです」

審査室から五人が出てくる。

柳井 「では次の五名をお呼びします。岡田かおるさん」
岡田 「はい」
柳井 「大内美晴さん」
美晴 「はい」
柳井 「滝口アオイさん」
アオイ 「あ、はい」
柳井 「佐久間藤枝さん、沢木頼子さん」

それぞれ返事をして立ち上がる。

○審査室

五人が並んで椅子に座っている。

黒崎

「えーそれでは、いろいろお伺いしていきたく思います——」

つばを飲み込み、大きく息をするアオイ。

○オーデイション会場の廊下　もしくは路上

アオイが歩いている。

後ろから大内美晴に呼び止められる。

美晴

「滝口さん」

アオイ

「大内さん……」

美晴

「あなたに言っておこうと思って」

アオイ

「なんですか？」

美晴

「負けないから」

アオイ

「え？」

美晴

「優勝は絶対、私」

アオイ

「選考結果は明後日ですし、そもそも私が決勝に行けるかなんて」

美晴 「あなたは絶対受かる。私も受かる。あなた以外大した人いなかったもの」
アオイ 「凄い自信ですね」
美晴 「とにかく、決勝の日、また会えるの楽しみにしてるから」
アオイ 「は、はい…」

美晴、別方向に歩き始める。

アオイ 「凄い人がいるな… 決勝か… 行けたら嬉しいけど…」

アオイ、美晴のうしろ姿を見つめてつぶやく。

○滝口家 部屋

翌々日。

芳江が部屋の掃除をしている。

ふいに電話が鳴る。

掃除機を止めて、電話を見つめる芳江。

芳江、いたたまれない不安感を覚え、電話機に手が伸びない。
鳴り続ける電話。

○路上

同時刻、高校の帰り道、路上を歩いているアオイ。

由美も一緒に歩いている。

アオイの携帯電話が鳴る。

アオイ、電話に出る。

アオイ 「もしもし—— はい、そうです。どうも… はい、え、本当ですか！ ほんとにほんとですか！ はい、分かりま

した。はい、ありがとうございます！」

由美 「どうしたの？」

アオイ 「受かったの、受かった！」

由美 「え？ なに？ 何？」

アオイ 「由美、どうしょ！ 受かっちゃったよ、マジで、凄くない？」

由美 「いや、わけわかんないって」

アオイ、由美の言葉も耳に入らず、喜んでいる。
あきれる由美。

○五十嵐総合病院 院長室

芳江 「失礼します」

芳江が入ってくる。

病院の院長、五十嵐総合病院院長が座っている。

五十嵐 「滝口アオイさんのお母様ですね」

芳江 「はい」

五十嵐 「当病院の院長、五十嵐と申します」

会釈をする芳江。

五十嵐 「先日、精密検査をさせていただいたアオイさんですが――」

芳江、目が大きく見開かれ驚愕の表情。

○予備校の教室

由美達、アオイの友達のアオイを囲んでいる。

由美 「ねーすごいっしょー！」

金井

「つてか、アオイにそんな夢があるなんてびっくりだよ」

アオイ

「ごめんね、内緒にしてて。落ちたら恥ずかしいじゃん」

飯干

「アオイにそんな行動力があるとは思わなかったよな」

向井

「決勝戦つてさ、一般も入れる会場なんだろ」

アオイ

「うん、公開オーディション」

金井

「絶対行くっしょ」

由美

「あたし、横断幕作る。みんなで応援に行く」

アオイ

「恥ずかしいからやめてよ」

飯干

「今さ、オーディションのホームページ見たんだけどさ」

飯干がスマホの画面を見ながら言う。

飯干

「当日ゲストでエターナルが来るんだって」

由美

「マジで！」

アオイ

「ハルキの事務所が協賛だから、確かに来てもおかしくないかも」

向井

「エターナルのハルキつてのと知り合いなんだろ。もう決まったようなもんじゃん」

アオイ

「そんなコネは通じないよ」

由美

「優勝したら、その事務所に入るってこと？」

アオイ

「多分ね」

由美

「絶対優勝しなさいよっ！」

アオイ
「分かんないよ」

広石が入ってくる。

広石
「はいみんな座って。ここは高校じゃないんだから、授業始めるわよ」

広石が黒板に向かって授業を書き始めた時、アオイが倒れる。

由美
「アオイ？ どしたの、アオイ！」

苦痛の表情を浮かべるアオイ

広石
「ちょっと、どうしたの！ 滝口さん！」

広石が慌てて駆けつける。

額に脂汗を浮かべて苦悶するアオイ。

広石
「滝口さん！ 滝口さん！」

広石の言葉が遠くなるように意識を失う。

○煮込みてらにし

仕込み作業をやっている山川。
そこへ、芳江が悲壮な顔で入ってくる。

山川 「おかえりなさい… どうしたんですか？」

無言でカウンターに座る芳江。
心配そうに見つめる山川。

山川 「女将さん？」

芳江 「健ちゃん… どうしよう…」

あわてて芳江のそばに行く山川。

山川 「どうしたんですか。何があつたんですか？」

芳江、山川に抱きついて大声で泣き出す。

山川 「女将さん？ 女将さん！」

○回想 五十嵐総合病院 院長室

五十嵐 「非常に言いづらいのですが、お嬢さんは大腸がんの疑いがあります」

芳江 「が、ガン…」

五十嵐 「はい。悪性のポリープの可能性もまだ捨てきれませんが、ほぼ、確実でしょう。大腸がんは初期症状が非常に少ないガンなのですが、レントゲンを見る限り進行はかなり進んでいると思われると思います。お嬢さんには今まで自覚症状があったかもしれません」

芳江 「嘘でしょ… あの子まだ十七歳なんですよ…」

五十嵐 「お気持ちにはわかります。確かに、がんは40代から発症するパターンが多いのですが、若年性ガンと言って、十代、二十代でも、発症するケースはあるんです」

芳江 「なんで… なんであの子までガンにならなきゃ…」

五十嵐 「失礼ですが、過去どなたかがガンに？」

芳江 「私の夫が… つまりあの子父親が、大腸ガンで…」

五十嵐 「そうでしたか。大腸ガンには家族性大腸腺腫症と呼ばれるものがあります。特定の遺伝子を持った体質の方が、二十代でおよそ十パーセント、四十代ではおよそ半数ほどの人が同種の病気になる可能性があります」

芳江 「治るんですか？」

五十嵐 「うーん…」

芳江 「治りますよね？ 医学だって、夫の時よりきつと進歩してるはずですし。治りますよね」

五十嵐 「まずは入院、さらに検査をしていきましょう」

芳江 「お願いします。治すって言ってください。夫も娘も同じ病気でなくすなんて嫌です。酷すぎます！」

五十嵐 「もちろん最善は尽くしますよ。すぐに入院の手続きをします。明日娘さんと来てください」

嗚咽で返事が出来ない芳江。

○煮込みやてらにし

少し落ち着いた芳江。しゃくりあげながら、山川に事の経緯を伝えていた。

山川 「そんな…」

山川、目に涙をためる。

山川 「そんなことってあるんですか？」

カウンターのテーブルを叩く。

芳江 「私、もうどうしていいか… アオイが帰って来た時、どうしたらいいか…」

山川 「女将さん、ここで女将さんまで弱気になっちゃダメです。気を強く持ってください」

芳江 「無理… 無理よ…」

山川 「まだダメって決まったわけじゃないでしょ。ちゃんと検査して、治療すれば治ります。女将さんがそんな悲觀的になつたら、アオイさん自身はどうなるんですか。あの子は強い子です。大将と女将さんの娘じゃないですか。そんなつまらない病気に負けるような子じゃありませんよ！」

芳江 「健ちゃん… そうだよね。ありがとう。私がしつかりしなきゃ。まだ全部だめだって決まったわけじゃないもんね」
山川 「そうです」

店の電話が鳴る。

山川 「はい、煮込みやてらにします。はい、滝口ですけど… えっ アオイさんが…！」

芳江、山川を見つめる。

言葉が出ず、ただ芳江を見つめるばかりの山川。

○五十嵐総合病院 病室

ベッドに寝ているアオイ。

傍らに院長の五十嵐、看護師の小森貴子がいる。

友人代表として由美が付き添っている。

ドアが開いて、芳江と山川が入ってくる。

芳江 「アオイ！」

貴子 「先ほど、鎮静剤を打ちました」

由美 「ごめんなさい、近くにいたのに全然気づかなくて…」

芳江 「由美ちゃん…あなたが運んでくれたの？」

由美 「予備校の授業中、倒れて、それで…」

山川 「先生、やはりこれも、例の…」

五十嵐 「そうですね。お若いから、進行も早い。おそらく今までのずいぶん我慢されてきたかも知れませんね」

うっすらと目を開けるアオイ。

芳江 「アオイ！」

アオイ 「おかあ、さん… ごめんね。今度はあたしが倒れちゃった…」

芳江 「あんたも疲れてるのよ、もう無理しちゃって」

アオイ 「お母さんに、似たんだね」

芳江 「そうね」

アオイ 「由美」

由美 「なに？」

アオイ 「ありがと」

由美 「何言つてのんよ。早く元気になってオーディションに出るんでしょ」

アオイ 「うん」

芳江 「オーディション？」

由美 「アオイ、シンデレラオーディションに応募して、決勝戦に残ってるんです」

芳江 「本当に？」

アオイ 「うん、ごめん。今日連絡が来てね、帰ったら報告しようと思つてたんだ…」

芳江 「そうなの… 決勝戦、凄いいじゃない。」

アオイ 「凄いでしょ」

芳江 「じゃあ早く退院できるように頑張らないとね」

アオイ 「うん。山川さん」

山川 「はい？」

アオイ 「あたしが帰れない間、お母さんお願い。さみしがり屋だから、あたしがいないと泣いちゃうから」

山川 「分かりました」

アオイ 「先生…」

五十嵐 「はい」

アオイ 「オーディションが三か月後なんです。それまでには元気になれますよね」

五十嵐 「…頑張りましょう」

アオイ、すうーつと意識がなくなる。

芳江
貴子
芳江

「アオイ！」

「眠っただけです。大丈夫」

「アオイ……」

芳江、アオイの手を握り締め、嗚咽する。

○院長室

五十嵐と芳江、山川が話している。

五十嵐

「あの様子を見る限り、病状は深刻とお伝えしなければいけません」

芳江

「深刻という……」

五十嵐

「がんの進行度をステージという言葉で表すのですが、お嬢さんの場合はおそらくステージⅡからⅢと考えられます」

山川

「手術ということですか」

五十嵐

「そうですね、それが出来る状態であるなら」

山川

「できないこともあるんですか？」

五十嵐

「検査次第ではあるのですが、ステージⅢは大腸以外の臓器への転移やリンパ節への転移が認められる場合を指します。

その場合は手術は出来ません。娘さんの場合、原発の大腸がんから転移してリンパ節、また、腹部にもがん細胞が散ら

ばっています。原発の癌を削除してもすべてを取ることは出来ません」

芳江

「じゃあどうなるんですか！」

五十嵐 「先ずは抗がん剤で腫瘍を小さくして延命措置を取ることも考えたのですが、貧血や腎機能の数値が非常に悪く、抗がん剤を投与しても、持つてあと一カ月かと・・・」

山川 「そんな・・・」

五十嵐 「今の保険医療での範疇では、正直この処置が限界です。」

芳江、気が遠くなる。

山川 「女将さん！」

芳江を支える山川。倒れないように必死に山川に抱き着く芳江。

芳江 「健ちゃん・・・」

五十嵐 「ガンは患者さんお一人で戦うものではありません。ご家族や仲間の方のご協力も不可欠です。それに彼女はオーデイションという夢もある。生きる気力というのはとても大事です。全力で頑張りますので、ぜひご協力を」

山川 「よろしくお願いいたします・・・」

二人、頭を下げる。

○病室

見舞いにハルキがいる。

ハルキ 「思ったよりも元気そうだ」

アオイ 「うん、毎日検査検査で大変だけどね。でもここに来てから痛くないんだ。早く退院できるといいな」

ハルキ 「そうだ、事務所で聞いたよ。シンデレラオーディション決勝進出おめでとう」

アオイ 「ありがとう」

ハルキ 「事務所で名前聞いたとき、びっくりしたよ。ほんとに応募するとは思わなかったし、まさか決勝行くなんてな」

アオイ 「あたしだってやる時はやるんだよ」

ハルキ 「見直したよ」

アオイ 「でしょー」

笑いあう二人。

ハルキ 「これから事務所でシンデレラオーディションで歌う歌の打ち合わせなんだ。作詞もしたから、多分俺がメインボーカ

ルを取るようになると思う」

アオイ 「すごーい、作詞とかしちゃうんだ」

ハルキ 「優勝してくれよ。アオイの為に書いたんだからさ」

アオイ 「うん」

見つめあう二人。

ハルキ 「また来るわ」

アオイ 「やめてよ、そんなに長いこと入院するつもりないんだし」

ハルキ 「あ、そうか、そりやそうだ」

笑いあう。

ハルキ 「じゃあな。次は ○○のステージで」

アオイ 「うん。お互い頑張ろう」

○病院入り口

ハルキが歩いている。

芳江 「ハルキさん」

ハルキが振り返ると、芳江が立っている。

○公園

ハルキと芳江が並んで座っている。

芳江 「忙しいのに呼び止めちゃってごめんなさいね」

ハルキ 「いえ。おばさんも大変だと思います」

芳江 「私はね…大丈夫なだけど…」

ハルキ 「アオイのことですか？」

芳江 「ええ…」

ハルキ 「なんの病気なんですか？」

芳江 「アオイから聞いてない？」

ハルキ 「ええ。彼女知ってるんですか？」

芳江 「昨日話したわ」

ハルキ 「何も言ってませんでした…」

芳江 「ハルキさんに心配させたくなかったのね」

ハルキ 「心配するほどの病気なんですか？」

芳江 「大腸がん」

ハルキ 「ガン…」

ハルキ、絶句する。

ハルキ 「治るんですか？ もちろん治るんですよ？」

芳江 「余命を告げられたわ…」

ハルキ 「…え」

芳江 「堪えられなくなつて涙声になる」 一か月…」

ハルキ 「嘘だ…そんな… 嘘でしょ… 早すぎる」

芳江 「…」

ハルキ 「アオイはそれを…」

芳江 「言えるわけないじゃない…」

○病室

寝ているアオイ。

手には事務局から送られてきた「シンデレラオーディション 決勝戦 エントリー票」とある。

アオイ 「ハルキ、ごめんね…」

アオイ、紙面を破く。

やがて破いた紙を抱きしめ、嗚咽する。

○公園

ハルキ 「免疫療法っていうのを聞いたことありますか？」

芳江 「免疫療法？ いいえ」

ハルキ 「俺も詳しくはないんですが、友達の母親がそれでガンが治ったって」

芳江 「本当に？」

ハルキ 「はい。先生に聞いてみてください。もしかしたら、アオイもきつと——」

○五十嵐総合病院 院長室

五十嵐と対峙している芳江。

五十嵐 「なるほど、免疫療法、ですか」

芳江 「治ると聞いたんです」

五十嵐 「治るといふ確証はありません。まだ研究中の技術で、有効性が科学的に証明されていない治療法です」

芳江 「でも治ったという人もいます」

五十嵐 「確かに。しかし全員ではありません。効果は未知数なんです」

「それでも、私は賭けてみたいんです。先生はこのままアオイが衰弱していくのを黙って見ていろとおっしゃるんですか！」

五十嵐 「延命できるように、最善の手は尽くしています」

芳江 「延命ではなく、治したいんですっ」

五十嵐 「……」

芳江 「訴えかけるように」せめて、後悔だけはしないように、やれることは全部やってあげたいんです…」

五十嵐 しばし考え、

五十嵐 「分かりました。私の知り合いで梶という医師がやっているクリニックを紹介します。免疫療法の第一人者です。紹介

状を書きますので、明日お渡しします」

芳江 「ありがとうございます」

芳江、出ていこうとする。

五十嵐 「奥さん」

呼び止められて振り向く芳江。

五十嵐 「免疫療法について、わざと教えなかったわけではありません。効果が明らかになっていない治療法は、保険診療として認められておりません。自由診療となるのです。つまり患者さん側の治療費全額負担です。それでもよろしいんですね」

芳江 「あの子の為ならお金はどうにかします。たとえばお店を売ってでも」

○ミラーズカンパニー レッスン場

一人でダンスを踊っているハルキ。
激しい音楽に、狂ったようなダンス。まるで、何かを忘れようとしているかのように、一心不乱に踊っている。

曲が終わり、倒れるように座り込むハルキ。肩で息をして、タオルで顔を拭く。

汗の中に、涙も混じっている。

そして、床をドンと殴りつける。

再び、殴り、また殴る。

ハルキ
「チクショー！」

大声で叫び、再び床を殴る。

そこへ、トウジが入ってくる。

トウジ
「ハルキ、レッスン場を壊す気か？」

ハルキ
「トウジさん……」

トウジ
「いつも冷静なお前にしちゃ珍しいな。何かあったか？」

ハルキ
「いえ、何も……」

トウジ
「…そうか、ならいいんだが。社長が探してたぞ。打ち合わせの時間になってもお前が来ないって。例のシンデレラの

件だろ」

ハルキ 「俺、歌いたくないです…」

トウジ 「つて言うと思ったよ。お前が俺たちをバックダンサーにして申し訳ないつて思うなら、気にするな。みんな納得済みだ。もしそれ以外の理由なら、社長に言え」

ハルキ 「…」

トウジ 「何があつたかは知らないが、公私混同はするな。それがプロだ」

ハルキ 「はい… 失礼します」

ハルキ出ていく。

○ミラーズカンパニー 会議室

社長の森脇、そして久光と菊枝がいる。

ハルキが入ってくる。

ハルキ 「失礼します」

久光 「あー来た来た。良かった」

菊枝 「どこへ行つてたの？ 時間は伝えてあつたわよね」

ハルキ 「レッスン場で… すいません、時間を忘れてダンスの稽古を…」

菊枝 「ハルキ、この世界はね時間厳守が——」

森脇 「まあいいじゃないか。ハルキ、座れ」

ハルキ 「失礼します」

森脇 「早速だが、例のシンデレラで歌う歌だけだな。ハルキの歌詞読んだよ。いやあ、良かった」

ハルキ 「ありがとうございます」

森脇 「これから夢を掴むんだっていう女性への素晴らしい応援歌になってる。もう作曲に入ってもらっている。明後日には出来るはずだ」

ハルキ 「その歌なんですけど、今回はナシってことにできませんか」

菊枝 「ちよっと、何言ってるの？」

ハルキ 「今回は歌いたくないって言ってるんです」

久光 「いやあ、それは困ります。プロデューサーの黒崎さんもあの歌詞がいたく気に入って、今後のシンデレラオーディションのテーマ曲にしようって話になってるんですよ」

ハルキ 「じゃあせめて、今回は俺のソロではなく、四人全員で歌うという方向で」

菊枝 「やっぱりメンバーに気兼ねしてるのね」

ハルキ 「そういうわけじゃないですけど」

菊枝 「じゃあどういうわけなの？」

ハルキ 「とにかくですね、四人でないなら、あの歌は歌いたくありません。出来れば既存の違う曲でお願いします。失礼します」

ハルキ、出ていく。

久光 「ちょっと待って！」

久光と菊枝があわてて追いかける。

○梶クリニツク 受付

ドアを開けて、入ってくる芳江。

受付で、患者の家族、園部みゆきが受付と押し問答をしている。

園部 「ちょっといくらなんでもこの金額は高くない？」

早苗 「申し訳ありませんが、正規のお値段なので」

園部 「足元見てるわよね」

早苗 「芳江に気付いて」どうぞ」

園部 「ちょっと、まだ話は終わってないのよ」

早苗 「次のお客様のお時間ですので。もしご不満でしたら他へ行かれては？」

園部 「言われなくても行くわよ」

早苗 「芳江に」どうぞお客様」

芳江 「すみません、これを…」

芳江、紹介状を早苗に渡す。

園部 「芳江に）こんなところやめた方がいいわよ。ぼったくりなんだから」
早苗 「（あきれて）園部さん……」
芳江 「私は娘が助かればいいんです。お金は二の次ですの」
園部 「あらそう。お金持ちはいいいわね。ふん」

園部、そそくさと出ていく。

早苗 「申し訳ありません」

芳江 「いえ……」

早苗 「先生がお待ちです。ご案内します」

芳江 「すみません」

○梶クリニツク 診察室

白衣を着た梶凜々子が座っている。

早苗 「失礼します。こちら、滝口さんです。これを」

そう言つて、紹介状を手渡す。

梶、それを受け取って、目を通す。

梶 「目を通したまま」どうぞ座ってください」

芳江、言われたまま座る。

早苗 「失礼します」

出ていく。

梶 「五十嵐さんの紹介ね。五十嵐さん、いい先生だったでしょ。今どき、なかなかあそこまで患者に親身になれる人はいないよ」

芳江 「はあ…」

梶 「大腸がんか… しかもステージⅢ… ここには書いてないけど、余命一か月とかって言われた感じ？」

芳江 「はい」

梶 「だろうねえ。若いから進行も速いしねえ。先に言っておくけど治るとは限らない、しかもお金は高い、それでもいい？」

芳江 「はい」

「免疫治療に関しては、奥さんも調べてきてると思うし、詳しい内容はお嬢さんにも話した方がいいと思うから後日ね。とりあえずうちの場合、ワクチン投与六回でワンセット、二百万。お嬢さんの場合二セットは見えた方がいいから、四百万、その他初期検査費用や場合によっては人工抗原するのが必要になるから、まあざっと五百万はかかるかな。当

然自己負担。奥さん、それでいい？」

芳江 「構いません」

梶 「オーケー。では改めて、お嬢さんの主治医になります、梶凜々子です。よろしく」

○芳江 自室

テーブルで預金通帳を広げている。

ため息。

通帳の残高は百五十万円といったところ。

意を決して、携帯を取り出し電話をかける。

○福島房江宅

居間。

電話が鳴る。真紀がそれを取る。

真紀 「はい、福島ですけどー」

○芳江 自室

芳江 「あ、もしもし、東京の芳江ですけど」

○房江宅

真紀 「あ、おばさん。お久しぶりっすー 母さん？ ちよつと待ってくださいね。(電話を離して) かーさん！ かーさん

いるー！ 東京の芳江おばさんから」

房江があわただしい様子で入ってくる。

(以下、電話のやり取り、場所指示せず)

房江 「あ、もしもし、姉さん？ 久しぶりじゃない、元気でやってるの？」

「ええ、まあね」

房江 「お店は順調？ たまには飲みに行つてあげたいんだけどねえ」

芳江 「うん、それはいいんだけどね…」

「どうしたの？ 何か相談？」

「ええ、実はね…」

房江 「お金え？ いくら？ そんなにいい？ 悪いけど無理だね。五万だつて出せないわよ。もしかしてお店上手くいってないの？ え？ なに、アオイちゃんが？ うん、ええ、病氣い？ ほんとに？ 治療代高いんだあ… 旦那に相談してみないと… でも難しいと思うけどねえ… ウチもローンが大変なのよ。家のローンもそうだけど、ほら、真紀が今年成人式でき、買わなくてもいいって言ったのに振袖とか買っちゃつて、それもローンだもん。首回らないわよ。アオイ

ちゃんには悪いけど、姉さんの方で頑張つてとかしか言えないなあ… 他のことは手伝うからさ、何かあったら言つてよ

芳江 「ああ、そう分かった、なんとかする。悪かったね。うん、じゃあ正雄さんにもよろしく。娘のことは言わなくていいわ。うん、じゃあね」

芳江、電話を切る。

ため息をつく芳江。

部屋の陰で、そのやり取りを聞いている山川。

○ミラーズカンパニー 会議室

エターナルのメンバーとリョウ、そして社長の森脇と菊枝がいる。

セナ 「で、結局、どうなんですか？ 新曲はお蔵入りで、既存の曲で行くんですか」

菊枝 「一応ね」

セナ 「一応じゃないですよ。この間リョウさんに言われて、心入れ替えて一致団結してやってこうって思ってたのに、早速これですか？ とにかく納得できる理由がない限り、受け入れられませんね」

トウゴ 「プロデューサーの黒崎さんはオーケーなんですか？」

森脇 「こちらに任せるとのことだ」

菊枝 「向こうとすれば、うちが協賛で、エターナルがメインキャラクターとして出てくれればいいわけだね」

セナ

「なんでこうも、ハルキに振り回されなきゃいけないんですかねえ」

カエデ

「もう振り付けを考え始めてるんですけど… やめた方がいいですか？」

ハルキ

「すまない」

リョウ

「ハルキ、今回はすまないの一言では済まないぞ。説明はしないと」

ハルキ

「実は、今回のオーディションの決勝戦、俺の幼なじみが出るんです。でも病気になるって、出られなくなりました…」

森脇

「一人、辞退者が出たと聞いた。その子か？」

ハルキ

「はい…」

トウゴ

「しかしな、俺は前言ったはずだ。公私混同はするなと」

ハルキ

「彼女、ガンなんです。余命一か月、伸びても半年。俺はあの歌の歌詞に「未来の扉」だの「夢の階段」だの「輝く明日」だの、そんなフレーズを書きました。僕はいま、そんな歌、歌えない… 歌えないんですよ！ プロじゃないっていうならその通り、僕はプロじゃありません、公私混同してる大馬鹿です。でも… でも… 俺は、歌えない…」

作者注：ラスト歌う歌を知らないのので、上記のセリフの歌詞部分は適当に書きました。内容によっては訂正、削除をお願いします。

一同、言葉が出ない。

リョウ

「俺は、今回は歌わなくていいと思った」

ハルキ

「リョウさん…」

リョウ

「その代り、その彼女に伝えておけ。余命なんか知ったことか。病気を治して、来年また決勝に上がって来いって。そ

れまで、ハルキの歌は封印でもいいと思う」

カエデ 「そうしましょう。一年あつたら、俺、すげー振り付けできますよ」

トウゴ 「俺も賛成だ。セナ？」

セナ 「場合によっちゃあ、エターナル辞めてやるって思ってたけど、その歌を歌うまでは俺も封印しときます」

一同に見えない糸でつながった団結力が芽生える。

森脇 「お前ら… ずっとガキだと思ってたが、大人になったな」

満足そうにハルキたちを見る森脇。

○煮込みてらにし 開店前の店内

カウンターに座って、ぼんやり考え事をしている芳江。

芳江 「(独り言) 店を売ってでも… か…」

芳江、大きくため息をついて、カウンターに突っ伏す。

そこへ山川が現れる。

山川 「女将さん」

芳江が顔を上げる。山川、預金通帳とカードを芳江目の前に置く。

山川 「三百万ほど入ってます。足りるか分かりませんが、使ってください」

芳江 「健ちゃん…（通帳を見て）ダメよ、あなたのお金でしょ」

山川 「アオイさんのためなら、使ってやってください。だから店を売るなんて、そんなこと考えないでください。大将の形見じゃないですか」

芳江 「健ちゃん…でも…」

山川 「大将の遺言なんです。この店の煮込みの味と、お二人を守ってくれって」

芳江 「健ちゃん。健ちゃんは充分にやってくれてる。あなたのおかげで私たちは…」

山川 「でも恩返しはまだできていません」

芳江 「恩返しだなんて、そんなこと——」

山川、ふと遠い目をする。

山川 「身寄りのなかった十五歳の俺を、住み込みの弟子として雇っていただき、高校まで出させてくれました。それだけで

も十分なのに、高校卒業の日、大将がこの通帳を俺にくれました。なんのお金だと思ったら、三年間の給料だって言うんです。毎月渡してたら、悪いことに使うだろってあの豪快な笑いをしながら…」

芳江 「知らなかった…」

山川

「でも思うんです。もしかしたらこれは、大将が俺に預けたお金なんじゃないかって。何かあったら頼むぞっていう…だからこいつは俺のお金だと思わないでください。大将からの贈り物なんです」

芳江、泣き出す。

芳江

「あなた…」

山川

「娘さんのためです。今使わなかったら、俺、大将に怒られます」

芳江

「(通帳を抱きしめて) ありがとうございます… ありがとうございます…」

泣いている芳江を見つめる山川。

○梶クリニック 玄関

芳江に連れてこられ梶クリニックに入っていくアオイ。

○梶クリニック 診察室

診察室で梶と対面するアオイ。傍らには心配そうな芳江の姿。

梶

「これから免疫治療というものを行います。簡単に説明するわね」

○梶クリニック

医療機器を使って、初期検査をしているアオイ

ベッドに寝て、注射を打たれているアオイ

点滴を施されているアオイ。

など、一連の治療がアオイに施されているバックで、梶の言葉が流れる。

梶

『私たちの体には、体内に毒素や病原菌が混入しても戦って排除してくれる免疫というのがあるのは知ってるわよね。でもその免疫が弱まってしまつと、がん細胞を排除しきれなかつたりするの。だから私たちは、免疫本来の力を回復させてがんを治療するってわけ。』

免疫治療にはね、今、たくさん治療法があるの先ず、抗がん剤と違って、癌細胞やその他の良い細胞を攻撃したり傷つけたりしないから、副作用が出にくいから安心してね

あなたの本來持つる免疫細胞を元気に機能させるの。

そして、体の中にあるがん細胞を発見してやつつけてくれるようにするために打つお薬が、ここで打つ点滴なのよ』

○梶クリニック 病室

ベッドに寝ているアオイ

アオイに点滴を施している、クリニックの看護師三原早苗。

早苗 「この点滴を打つと、食欲も増します。栄養のあるものを食べて体力も回復させて下さいね。」
アオイ 「はい」

そこへ、梶が入ってくる。

梶 「調子はどう？」

アオイ 「まあまあ、です」

梶 「まあまあ、か」

アオイ 「先生、助かりますか？」

梶 「助かりますか？じゃなくて、今、助かってるじゃない。大切な事は、今、生きてること。あなたは、「今」、しっかり生きてる」

アオイ 「そうですね…」

梶 「血液検査の結果から、ヘモグロビンの数値が下がってるのね。癌になると、貧血が進むの。だから、輸血をしてもらわないとダメなの。その時に、カリウムやカルシウムが上がる可能性があるから、中和するように塩化ナトリウムの点滴を打ってもらってね」

アオイ 「よく分かんないですけど…大変なんだなってことは分かりました」

梶 「それでよろしい」

アオイ 「ずっとこの点滴を続けるんですか？」

早苗 「この点滴は、1クール3回して、そのあと様子を見ます。まずは、1回打って、一週間後にまた1回、そして、二週

間後にもう一回打ちます。癌細胞の大きさは、リスクチェッカーと言う血液検査でわかります、腫瘍マーカーが下がって
いけば腫瘍が小さくなつてると言うことよ」

アオイ 「飲み薬もありましたよね」

梶 「ええ。その薬を一日三回飲んで。がん細胞をアポトーシスさせるの。つまり、がん細胞を自然死させるように働きか

けてくれるってわけ」

アオイ 「大変だ」

早苗 「だけど体が良くなるため。頑張つてね」

梶と早苗が点滴をセットして出ていく。

アオイ 「生きるって大変なんだなあ」

交代するかのように、一人の女性が入ってくる。
シンデレラオーディションの大内美晴である。

美晴 「お久しぶり」

アオイ 「え」

美晴 「やっと見つけた」

アオイ 「大内さん」

美晴 「覚えててくれてありがと」

アオイ 「どうして、ここが…」

美晴 「あなたがシンデレラオーディションを辞退したって話聞いてね。いろいろ探し回って、ようやく見つけた」

アオイ 「ごめんなさい。こんな状態だから…」

美晴 「びつくりした。でも治るんでしょ」

アオイ 「分かんない…」

美晴 「分かんないじゃないわよ、治すのよ。でなきゃ私まで辞退した意味がない」

アオイ 「辞退？ オーディションに出ないの？」

美晴 「あなたのいないオーディションに出ても意味がないんだ」

アオイ 「どういう…こと？」

美晴 「私はねあなたに勝って優勝するの。だから病気治して、来年もう一度シンデレラオーディションに出るの」

アオイ 「大内さん…」

美晴 「美晴でいいよ。アオイさん」

アオイ 「うん、美晴さん」

美晴 「じゃね」

美晴、背を向けて歩き出すが、ふと振り返る。

美晴 「あ、そうだ。事務局に直談判して、来年のオーディション、あたしたちは書類審査はナシってことで交渉したから」

アオイ 「笑って」 美晴さん凄いな

美晴 「だから絶対元気になるんだよ」

そう言って、美晴出ていく。

美晴のやさしさに涙があふれるアオイ。

○梶クリニック 受付前

車いすのアオイと芳江、ハルキがいる。

梶 「ワンクール、お疲れ様。抗がん剤との併用で辛かったかもしれないけど、とりあえず一時退院」

芳江 「ありがとうございます」

梶 「調子が悪くなったらすぐに連絡してくるように」

アオイ 「はい」

ハルキが車いすを押して、病院から出ていく。

○路上

アオイ 「お母さん」

芳江 「なに？」

アオイ 「ハルキと散歩したい」

芳江 「分かった。じゃあ先に帰ってる。体冷やさないようにね」

アオイ 「大丈夫」

芳江 「(ハルキに) じゃあよろしくね」

ハルキ 「はい」

芳江、先に歩いていく。

ハルキ 「どこ行きたい?」

芳江 「子供の頃に遊んだ、あの公園」

○ミラーズカンパニー 事務所

森脇と久光、菊枝が机を囲んで、考え込んでいる。

そこへ、トウゴがやってくる。

トウゴ 「おはようございます」

森脇 「おお、忙しいところすまんね」

トウゴ 「どうしました、突然」

菊枝 「これ、明日出るって」

菊枝が、写真雑誌の紙面のコピーを見せる。

そこには

『エターナル ハルキの純愛——

病気の彼女と愛を育む つかの間の休息を激写！』

というタイトル文字と二人が公園で笑いあっている様子の写真が掲載されている。

トウゴ

「なんすか、これ」

菊枝

「例の彼女よ、オーデイション辞退したっていう」

久光

「とにかくですね、こんな写真が出回ったら、女性ファン減りますよ。エターナル、どうするんですか」

トウゴ

「ハルキに連絡はとりました？」

菊枝

「電話で話した」

トウゴ

「で？」

菊枝

「付き合っていない。幼なじみだって」

トウゴ

「ならいいじゃないですか」

久光

「とにかくですね、まずホームページに、記事は事実無根であるって表明してですね、正式に否定しないと」

森脇

「その程度じゃ説得力はない」

久光

「ですけど——」

森脇

「記者会見だな」

菊枝

「直接本人に話をさせるんですか？」

森脇

「当然だ」

久光

「失礼ながら、それはちよつとリスクが高くないでしょうか」

森脇

「心配するな」

トウゴ

「社長、何か考えがあるんですね？」

森脇、それには答えず、一人思索する。

○記者会見会場

ハルキが一人で立っている。

カメラのストロボが激しく明滅している。

ハルキ

「この度写真雑誌に掲載された写真は紛れもなく俺自身です。ただ、一緒に写っている女性は、恋人ではなく、大切な友人です。ご覧の通り彼女は病気で、俺がそばにいて元気づけられるなら、俺は時間の許す限り何時間でも一緒にいたいと思っています。」

この記者会見をテレビで見ている人のなかで、彼女と同じように病と闘っている人がいるかも知れません。もし俺やエターナルの歌で元気になれるのなら、俺たちはいくらでも歌います。それが、俺がこの世界で生きていく意味だと思っからです——」

再び激しいシャッター音。

○ミラーズカンパニー事務所内

パソコンを見つめて、驚いている久光。それを後ろからのぞき込んでいる菊枝。

久光 「凄いです… 昨日の記者会見、バッシングしてる人が一人もない」

菊枝 「偽善とか売名とか言われ放題かと思っただけど、あのハルキの迫力にみんな圧倒された感じね」

そこへ森脇が戻ってくる。

久光 「社長、昨日のハルキの会見、好意的な意見ばかりです。社長から何か作戦でも授けたんですか？」

森脇 「いや、何も言っていない」

菊枝 「社長の入れ知恵じゃないんですか」

森脇 「もし私がそんな姑息なことしたら、世間はすぐに見抜く。ハルキにはただ思ったことを言っただけだ」

久光 「いやあ、賭けですね…」

森脇 「お前ら、ハルキの事全くわかってないな。あいつは、私たちが計れないほどの大きな器を持っている男だ」

さあこれから忙しくなるぞ。ハルキブームが来る。心しておくんだな」

○予備校 教室（教務室）

車いすのアオイが広石詩織と会っている。

詩織 「ここを辞める…」

アオイ 「はい。私の病気でお金もかかってますし、大学にだって行けるかどうか… それに…」

詩織 「それに？」

アオイ 「今を生きてるってことを実感してるんです。今のこの一分一秒が愛おしく思っているんです。そんなこと、今まで一度も考えたことなかったのに」

「素晴らしいことに気付いたわね。あなたの年でそんな風に考える人は今までいなかったわ。今が当たり前だと思ってる。でも現実はずう。この時間こそまさに「命そのもの」なの。『Time is Money』って言う言葉があるでしょ、でも私は違うと思ってる。『Time is Life』なの」

アオイ 『Time is Life』…

詩織 「人は誰でもいつかは死ぬわ。時間はみんな限られてる。だからこそ、その時間を意識して生きなきゃダメ。お金で苦勞してるかもしれない。病気で苦しい思っているかもしれない。それでも時間は平等に流れている。一分一秒を大切に生きる、それに気づいただけでも、これからのあなたの人生は大きく変わると思う」

アオイ 「はい」

詩織 「応援してるわ。勉強しなくなったらいつでもここに戻って来ていいんだからね。大学なんていつでも行けるんだから」

アオイ 「ありがとうございます」

アオイ、頭を下げる。

思わず、そんな姿のアオイを抱きしめる詩織。

○予備校の教室

由美を中心に金井、向井、飯干が集まっている。

由美 「アオイがここ、辞めたって」

金井 「マジで？」

向井 「病気よっぽど深刻なんだろうな……」

由美 「でね、一発で病気が治っちゃうような、すごいサプライズを考えてるんだ」

飯干 「なになに？」

由美 「あのね——」

四人の密談が進む。

○煮込みてらし

芳江に直談判しにくる由美たち。

由美 「ハルキさんに会わせてください」

芳江 「え？」

由美 「どうしてもハルキさんでないとダメなんです。別に私が死ぬほどファンだからとかそういうんじゃないんで、お願いが

あるんです！」

芳江 「でもアオイに相談しないと…」

由美 「言わないでください。だからこうしてお母さんにお願ひに上がってるんです！」

由美や金井たち、一斉に頭を下げる。

困惑して、山川を見つめる芳江。

同じく首をかしげる山川。

○とあるコンサート会場前

タクシー二台がホール裏の楽屋口に止まる。

○タクシー内

アオイの隣に由美が座っている。

前の座席には芳江もいる。

アオイ 「どいっ！」

由美 「いいから、いいから」

○タクシー外

二百目のタクシーから金井たちが下りてきて、車いすをセットし、アオイを座らせる。

アオイ 「え、ちょっと、分からないんだけど…」

そこへ、楽屋口からサングラス姿のハルキが出てくる。

ハルキ 「時間びったりだ」

由美 「本当をお願いを聞いてくださって、ありがとうございます」

アオイ 「由美…？ ハルキ…？」

由美 「ごめんね、知り合いになっちゃった」

金井 「(アオイに小声で)俺達にはラブラブになったって言ってたけどな」

ハルキ 「さあ、お待ちかねだ。中へ入ろう」

金井たちが車いすを押して、楽屋口から入る。

○ノーティボーイズの楽屋前

ノーティボーイズの面々が待っている。

アオイ、絶句。

ノーティイ「お待ちしました」

アオイに握手をする面々。

アオイ 「え、嘘——」

由美 「元気になった？」

アオイ 「なんで、由美たちが……」

飯干 「ハルキさんのお陰だよ」

向井 「由美が直談判して、ノーティイボーイズに会わせてやってってくれて」

ノーティイ 「病気、負けるな」

ノーティイ 「頑張れ」

ノーティイボーイズの面々がみなアオイに励ましの言葉をかける。

ありがとう、ありがとうと笑顔で返すアオイ。

○梶クリニック

梶がカルテを見ながら電話をしている。

梶 「思ったより、数値が良くない。これ以上やると負担が大きくなって、逆に危険だと思っ」

○五十嵐総合病院

電話の相手は五十嵐。

五十嵐 「君が言うならそうなんだろう。余命一か月を、もう二か月も伸ばしてる。大したものだと思うがね」

○梶クリニック

梶 「治せなかった……」

梶、悔しさをこぶしを握る。

○五十嵐総合病院

五十嵐 「もう少しだけ頑張ってくれんかね。彼女の母親に言われたんだ。彼女、オーディションに応募していたらしい。本当はクリスマス夜の夜が決勝戦でそれに出場するはずだったんだ。それまで持ちこたえてほしい」

○梶クリニック

梶 「イブまで…あと二十日ね…」

梶、電話を切る。

大きく息を吐き、背もたれに寄り掛かる。

○梶クリニック

翌日、アオイが再び車いすで訪れる。
かなり弱っている様子。

付き添いで、芳江がいる。

梶 「さて、今日から二クール目よ。体調はどう？」

アオイ 「あまり…」

梶 「弱気にならないで。負けちゃダメよ」

アオイ 「はい…」

芳江 「よろしくお願いいたします」

梶 「はい」

○クリニック ベッド

点滴を打っているアオイ。

早苗 「お家で何やってたの？」

アオイ 「やりたかったことをたくさん」

早苗 「へえそうなんだ、何やったの？ 教えてよー」

アオイ 「まず、日記を書き始めました」

早苗 「日記？」

アオイ 「今日、一日何をやったか、無駄な時間はなかったか、いろいろなものに感謝したか、そして明日何をやりたいか、そんなことを書くんです」

早苗 「へえ、いいわねえ。私も日記付けてみようかな」

アオイ 「Time is Life」

早苗 「えっ。」

アオイ 「日記のタイトルです」

早苗、言葉が続かなくて、アオイを見つめる。
ゆっくり目を閉じるアオイ。

○梶クリニック 院長室

芳江と梶が話している。

梶 「免疫治療は、彼女の延命につながっています」

芳江 「はい…」

梶 「しかし、今クルールの投与はアオイさんに大きな負担をかけるものと思われます。ですが——」

芳江 「…はい」

梶 「年越しをお約束出来ません…」

芳江、言葉が出ない。

○煮込みてらにし

いつものように混雑している店内。

そしていつものように明るくふるまっている芳江。まるで全てを忘れるために無理して明るくしているようでもあり、山川や斉藤は複雑な思いで芳江を見ている。

石橋 「女将さん、最近、アオイちゃん見ないね」

村上 「受験で忙しいんですよ」

芳江 「そうなのよー、だから最近全然構ってもらえなくなってる」

涼子 「すみませーん、こっちに煮込み二つ」

芳江 「はい、ありがとねー」

山田 「あとビールもくださーい」

芳江 「ただいまー」

芳江、ビールを若者たちのテーブルに運ぶ。

芳江 「みんないくつ？」

恵梨香 「二十二です」

岡本 「来年、就職なんで、いまのうちに仲間が集まって飲もうって」

芳江 「そう。若くていいわね…」

声が詰まる芳江。

山田 「あ、どうかしました？」

芳江 「ううん、なんでもない。みんな、毎日を精一杯生きてね」

恵梨香 「は、はい…」

斉藤が割って入る。

斉藤 「はい、煮込みお待ちいー」

芳江の言葉を忘れて盛り上がる若者たち。
その様子を、見つめている山川。

○梶クリニック アオイの部屋

梶に連れられて、ハルキが入ってくる。

アオイ 「ハルキ…」

声に張りのないアオイ。

ハルキ 「先生に頼んで、一日だけ外出許可をもらった」

梶 「スーパードールと頼みとあつちや、鬼の梶凜々子も負けちゃうわよね」

ハルキ 「これなんだ」

ハルキ、シンデレラオーディションの入場券を見せる。

アオイ 「これって…」

ハルキ 「見に来てほしい。まあ来年の予習だ」

アオイ 「いいんですか?」

梶 「主治医として、私も付きそうって言う条件だね」

ハルキ 「アオイ…」

梶 「じゃあ私はこれで」

梶 出ていく。

○梶クリニック アオイの部屋の前

扉を閉める梶。

扉に背をついて、涙をこらえる。

○梶クリニック アオイの部屋

オーデイションの当日

アオイの部屋に由美達が集まっている。

由美が、アオイの顔に化粧をしている。

金井 「これ、俺たちからのプレゼント」

そう言つて、きれいなドレスを見せる。
わあつと喜ぶアオイ。

飯干 「今日はこれ着て、行つてくれよな」

アオイ 「シンデレラみたい…」

由美 「そう、私たちはね、あんたがシンデレラだと思つてるよ」

○梶クリニツク 玄関前

車いすの乗ったアオイと友人たち、玄関前では芳江と梶が待っている。
ドレス姿のアオイを見て驚く二人。

芳江 「素敵じゃない」

アオイ 「車いすだけどね」

梶 「きれいだよ」

タクシーが到着し、分乗する面々。

○会場

会場前にタクシーが到着。

仲間が車いすを広げて、アオイを乗せる。

ふとアオイを見つめている女性がいる。

アオイ 「美晴さん——」

アオイに気付かれたことを知ると、小さくうなづいて、微笑を浮かべる美晴。
そのまま、中に入っていく。

由美 「誰？」

アオイ 「もう一人の辞退者」

○会場 楽屋

エターナルのメンバーが集まっている。

社長や、菊枝、プロデューサーの黒崎もいる。

森脇 「当日発表になっちゃって申し訳ないが、今日は二曲歌ってもらおう」

セナ 「え？ 二曲？ なんで？」

森脇 「曲は予定通り、四人で「直球ストレート！」を歌う。そのあと、済まないが、ハルキ残して三人はハケてほしい」

カエデ 「つてことは、あの曲歌うんだ」

セナ 「しかも、ソロで…」

トウゴ 「みんな、実は——」

セナ 「分かつてる。歌わなきゃいけない事情があるんだろ」

ハルキ 「みんな、ごめん。俺のわがままを…」

カエデ 「わがままだなんて思つてないですよ」

セナ 「歌わなきゃいけない時つてあるよ」

ハルキ 「ありがとう…」

黒崎 「そろそろ開場だ。みんなよろしく頼むな」

一同、はいつと答える。

○場内 客席

カエデには専用席が設けられ、芳江や仲間はその近くに座る。

熱気が盛り上がってくる。

○ステージ上

暗くなり、オープニング曲が始まる。
照明の中に、MCの寺内洋一が現れる。

寺内

「それではお待たせいたしました。東京ボーイズコレクションシヨンプレゼンツ シンデレラオーディションの開催です！」

歓声。

幕があがり、シンデレラを夢見る少女たちがずらりと並ぶ。

○客席

アオイ 「ねえ、お母さん」

芳江 「なに？」

アオイ 「もし私があの中にいたら、どうだった？」

芳江 「氣を失うか、声がかかるまで叫んじやうかもね」

アオイ 「そんなお母さん、見たかったな」

○ステージ上

寺内の司会で、五人のシンデレラ候補がインタビュウを受けている。

寺内

「さて盛り上がってまいりましたが、ここから審査に入ります！　では審査員の皆さんの紹介です！　まず、シンデレラオーディションの主催、黒崎淳」

「（マイクをもつて）第二回目のシンデレラオーディション、無事に幕が開いて感無量です。五人のシンデレラ候補のみなさん、頑張ってください」

寺内

「続きまして、審査委員長、音楽評論家、花井幸太郎さん」

花井

「花井でございます。日本を代表するような素敵な女性に出会えると聞いて楽しみにきました。頑張ってください」

寺内

「続きまして、モデル、桑原玲子さん」

玲子

「桑原でございます。男性陣はね、きれいな女性を前にすると甘くなってしまうので、私は厳しい目で見させてもらおうかなって思っています」

寺内

「続きまして、東京ボーイズコレクションから、俳優蛭川泰樹さん」

蛭川

「どうもです。いつか僕と共演してくれる素敵な女優さんになってくれたら、と思い、下心抜きでやってきました。よろしく」

寺内

「厳しいお言葉、優しいお言葉、ありがとうございます。果たして、今年のシンデレラは誰なのか！？期待が高まります！……が、その前に……皆様お待ちかね！『エターナル』の皆さんによる、ミニライブです！！！」

観客がさらにどよめく。

イントロが流れ、メンバーが入ってくる。

歓声と悲鳴が会場内に響き渡る。

○客席

アオイ 「ハルキ… ありがとうね…」

元気がない、笑みを浮かべる。

○ステージ

曲が終わって、トウゴがマイクで話をする。

トウゴ

「今日はどうもありがとう。今夜、このステージで、素敵なシンデレラを生まれることを楽しみにしています。その前に、もう一曲聞いてください。ハルキ！」

呼ばれて、ハルキが前が出る。

トウゴ

「次の曲は、ハルキに任せます」

トウゴ、マイクを渡す。

センターをハルキに預け、トウゴステージから出ていく。他の二人も出ていく。一人残ったハルキ。

ハルキ 「…すみません、時間もらっちゃって …今から歌う曲は、俺の、…ずっと、ずっと……片思いしてる相手に送る、歌

です」

歎声。

ハルキ

「…その子は、臆病で、…引つ込み思案で、でも時々すごく大胆で、…いつも、俺のことを、応援してくれていました。…彼女は、今、…病と闘いながら、…この会場にいます。……どれだけしんどくても、泣き言も言わないで、いつも皆のために、笑って、……彼女は、シンデレラになりたい、そう言っていました。…随分、小さいころの話だけど、約束したんです。…俺が、王子様になって、必ず迎えに行くって。…ガラスの靴なんか履いてなくても、俺の中で、お姫様は、……彼女しかいません。……こんなこと言ったら、…また、怒られちゃうかも、しれないけど…」

アオイ、涙を流しながら聞いている。

ハルキ

「聞いてください」

ハルキ、歌いだす。

歌をバックに、アオイの脳裏に子供の頃とハルキと遊んだ記憶がよみがえる。

歌が終わるころ、アオイ、ゆっくりと息を引き取る。

○煮込みてらにし

それに気づいた梶がアオイを見つめ、芳江がアオイに抱き着く。
ハルキが歌い終わって、大拍手が客席を包んでいるはずだが、アオイの周りだけ別世界。
全ての音が消え、時間が止まる——
泣き出す由美、悔し涙を浮かべる友人たち
少し離れたところでその様子に気付き見つめる美晴。
拍手が戻り、時間が動き出す。

数か月後——

開店前の店。

掃除をしている芳江。仕込みをしている山川。

電話が鳴る。

芳江 「はい、煮込みてらにします。あら、斉藤君。うん、あつそお。はい、分かりました」

電話を切る芳江。

芳江 「また遅刻だって」

包丁を研ぎながら、苦笑いの山川。
再び、電話。

芳江 「はい、煮込みてらにします。はい、大丈夫ですよ。六時から、はい、五名様ね。はい、お待ちしております」

電話を切る。

芳江 「また予約。これで三組目」

山川 「今日も忙しくなりそうですね」

芳江 「そうですね」

芳江、店の前に出て、太陽を仰ぐ。
そこへ、ハルキがやってくる。

ハルキ 「こんにちは」

○店内

芳江 「あれから三か月か… 早いものね」

ハルキ 「ここにいないのが、いまだに信じられないです」

芳江 「でも、私たちの中にはいる。私の中ではずっと生きてる」

ハルキ 「はい」

芳江 「そうだ、これ、渡そうと思って」

芳江、カウンターの奥からノートを取り出し、ハルキの前に置く。

ノートの表紙には「Time is Life」と書かれている。

ハルキ 「これは」

芳江 「あの子の日記」

ハルキ 「いいんですか？」

芳江 「あなたに読んでもらいたいの」

ハルキ、ノートを広げる。

芳江 「ほとんどあなたのことはかり書かれてる。最後なんてね、多分力が出なかったんでしょね、文字が震えて… ずつ

とハルキハルキつてあなたの名前だけが綴られているの」

ハルキが文字を追うと、最後のページには、いくつものハルキの名前が書かれている。

そして、もう一枚ページを開くと、

「ハルキ ありがとう わたしのぶんまで生きてね あなたのシンデレラより」

と書かれていた――